なぜ里川とコンパクトシティか？

陣内　秀信　　法政大学工学部　教授

コンパクトシティ×里川＝？

先程、コルバンさんと高橋先生から、みんながかつて持っていた水の感性や豊かさと、水の感覚を復活させる意義をたっぷりお話を聞かせていただきました。そのようなものを目指して活動していく上で、里川という言葉が我々の心を奮い立たせてくれるのではないかと考えています。

さて、里川はともかく、「コンパクトシティ」というのは、馴染みが薄い言葉です。この 2 つの馴染みの薄い言葉を結び付けるわけですが、この 2 つは現代の都市を再生していく上では、非常に確実な方向性を示してくれるのではないかと思います。

里川は、人々に利用されながら親しまれてきた川です。

一方、コンパクトシティですが、川が失われたのと同じように、我々は工業化社会をあまりに追求したために、田園を食いつぶし、外に向かって都市を拡張してきた。それが都市のバランスを変え、自然との共生も失われました。本来、多種多様な機能と活動が集まっていた「都市」は求心力を失い、衰退していきました。「それではまずい。これからはサスティナブル・ディベロップメント、つまり持続的な開発を求める必要がある」という認識の下、都市をコンパクトにしていかなければいけないという考え方が出てきました。

人口の減少時代、成熟社会を迎えた今日、まさにこのような考え方が必要だと言われてきています。コンパクトシティには、量から質へ、そしてゆとり、個性、アイデンティティを持った地域、そして都市をつくろうというメッセージが込められています。

この概念はイギリスから始まった言い方ですが、現在はヨーロッパ全体に広く受け止められ、日本各地でも、このような言葉が使われ始めています。また、エコロジーと歴史の観点に基づいた地域づくりという意味にもなろうかと思います。

これに「里川」という言葉を絡め合わせ、都市を見直し、感受性を取り戻し、そして豊かな環境を作っていきたいと我々は考えているわけです。

水辺を失った近代

近代における川や水辺の喪失の例としては、例えば数寄屋橋があります。数寄屋橋には豊かな都心の水辺空間が、東京オリンピックの直前までありました。この水辺が失われる際には、いささかの反対運動がありました。しかし、これを取材したジャーナリストはデモ隊に共鳴を持っていたのですが、あまりの臭さに埋め立てざるを得ないと記事の最後に結んでいました。

かつての数寄屋橋

ボローニャ　レーノ川の水辺空間

1950 年代に埋立てられる

水辺を失ったのは、日本だけではありません。イタリアのボローニャは、現在では都市づくりが成功した代表的な街と言われていますが、そのような街でさえ、かつてあった水辺が失われ、1950 年代に埋められました。まさにこれは里川であったと思います。洗濯をする人達、水に入って泳ぐ人達がいました。ボローニャでは、このように失われた記憶を取り戻すために、現在では展覧会を開催したり、出版物を出したりしています。

また、ミラノのナヴィリオでは 1913 年に水泳大会が行われましたが、水辺が生き生きと使われていたことに驚かされます。幸い、ミラノでは 1960 年代後半から住民、行政、専門家の努力が実り、川を蘇らせようという思いが実を結び、20 年くらい前から水辺が蘇ってきました。今最も人気があるスポットというと、このナヴィリオです。週末は大勢の若者、そして中高年の人達で溢れます。このような成功事例もあります。

ナヴィリオ　1913 年の水泳大会（左）と、現在（右）

里川は都市の原風景

それでは、東京のような巨大都市で、里川という概念を用いて水の復権を考えることができるのかどうか。かつて、川添登さんの『東京の原風景』(日本放送出版協会、1979)という本が出版されました。コンクリートジャングルと言われていた東京に、緑豊かな田園都市が江戸から明治にかけてあったということで、東京の原風景が書かれています。これはもともと奥野健男さんが文学の世界で、『文学における原風景』という本を 1972 年に著したのがきっかけになっており、大きな影響を与えました。

このように考えると、里川というのはまさに「原風景」でして、もう一度我々の心の中の原風景を思い出し、それを豊かな環境づくりのイマジネーションに結び付けていく可能性を秘めているのではないかと考えます。

コンパクトシティという言葉は、元来田園志向が強く都市の求心力よりも田園への分散傾向がより強いイギリスの伝統を背景に、都市の機能をコンパクトにまとめることで魅力を増し環境負荷も減らせるという意味で使われています。ラテン系の人達や、フランス人やイタリア人は、イギリス人とは対照的に、都市型人間で、都市へ戻ってくるという性格が強いのですが、それでも高度成長期にはどんどん拡大し、都市は形を失いつつありました。

ボローニャは、1970 年代前半にコンパクトシティを目指そうと、都心の老朽化した部分を修復再生し、ハウジングのプロジェクトを行い、コミュニティと都市空間を蘇らせました。これで、コンパクトシティが実現していきました。

水を巡るコンパクトシティという点では、トレヴィーゾという町が、ヴェネツィアから車で 40 分くらいの郊外にあります。水が巡っていて大変美しい水辺の町です。人々は、この水辺を守るために、大変な努力を払ってきました。その成果が表れ、現在非常にチャーミングな人気のある町になっています。

一方、東京はどうかというと、戦後、とりわけ高度成長期には、どんどん郊外に都市が発展していきました。都市史研究家の鈴木理生さんは、このような郊外化、ベットタウン化を批判し、「単にベットタウンが出来ただけで、都市ができたわけではない、つまり、都市のアイデンティティ、人々の愛着や豊かな生活空間などが成立しておらず、ただ寝に帰るだけで都市化ではないのではないか」とさえ言いました。

したがって、もう一度今まで歴史の中で培われてきた環境、コミュニティ、町の歴史を思いつつ、そして地域のアイデンティティを再構成して、豊かな環境を作ろうという時に、川が果たす役割は非常に大きいのではないかと思います。

東京を里川が結ぶコミュニティ群として見る

東京再生の方向性ですが、河原一郎さんの著作『地域環境と東京』(筑摩書房、2001)を見ると、東京には河川流域のコミュニティが葉の葉脈状に入り込んでいます。先ほどのコルバンさんのお話の中に、「ブラーシュの地理のテキストに、細かい川の流れを記述していて子供達は勉強した」という話がありましたが、まさに東京はそれを絵に書いたような街です。谷があり山があり、どこにも山の辺と水の辺があります。川が流れ込んでそれぞれにコミュニティができています。このような状況を素材として持っていることを思い起こす必要があると思います。

杉並区では、河川沿いに縄文の時代から人々が住んできたことは明らかです。そして、古墳の分布を見てみると、同じように川沿いにあります。また、神社があるということは集落があるということで、いずれも川を中心にコミュニティが形成された様子が明らかにわかります。このように、地域には古層というものがあり、東京も例外ではありません。

19 世紀初めの江戸鳥瞰図を見ると、この中に多くの水の流れが生き生きと描かれています。隅田川、神田川、日本橋川、そして数多くの里川と呼ばれる小さい川。また大きな川も考え方によっては里川と言えます。

永井荷風が大正時代に書いた都市歩きの名作『日和下駄』の第 6 の項目の中に、水の豊かさを書いています。さまざまな水辺や海もあり、池もあり、大きな川、小さな川、井戸など、多様な水が東京の中にたくさんあります。さらに、東京の河川・水路図を見ると、非常に多くの川が流れているわけです。まさに、東京は川を中心にコミュニティを、地域を、そしてコンパクトシティを再構成していけるのではないかと思います。

いくつかの例を紹介します。失われた川ではあるのですが、江戸時代の切絵図を見ると、藍染川という川が、根津の町を通り不忍池に流れ込んでいました。明治 35 年のまだ野菜の洗い場があるような写真や、大正 4 年の川が氾濫した様子の写真などが残されていますが、水の氾濫などと付き合いながら環境を作っていくというシーンだと思います。写真を提供してくれた『谷根千』は、まさに地域雑誌として頑張っているわけですが、東京の中には数多くの地域があり、それぞれが里川のイメ

ージをもともと持っているということが重要だと思います。

地域がいろいろな要素を持っていて、1 つのまとまりを示していました。それは、都市景観、地形にも表れています。本郷台地に行くと、今でもお屋敷があります。そして、その際までいくと根津神社があり、下っていくと下町的コミュニティがあり、そして本来はここに川が流れていた、というように、一つのセットとして地域があるのですが、だんだん都市が肥大化し、境界が見えなくなり、意識が希薄になり、川の存在が忘れられ、地域のコンパクト性が認識できなくなっているのが現状です。

本来は、日本の地域には神社があり、山の手、山の辺、水の辺があり、それはどこも持っていたわけです。そして、海の方に行くと、海中渡御までやり、非常に水と人間のコミュニティの暮らしが結びついていました。

品川　荏原神社　海上渡船

1860 年代の古川 （現・麻布、三田辺り）

明治 16 年頃には、現在の東京タワーの近くに古川が流れていました。現在の麻布十番辺りは、明治から花柳界があり三味線も聞こえていたところです。そして、高台と低い方に別れて役割の分担があり、いろいろな産業もありました。町工場もあり、地域の人にとっては里川であったと思います。今は、高速の下になっています。しかし、イメージは再現できるのではないかと思います。

また、東京にとって神田川は非常に重要な川です。明治の地図を見ると、元の細川邸に新江戸川公園という素晴らしい庭園があります。昔は川が蛇行していましたが、今はまっすぐになりました。そして、水神社があり水の神様を祭っています。この辺りから水を分岐させて、神田上水で江戸の水道にしていました。

まさに里川としてあったものが変遷していくプロセスを示したものを見ると、川の周りにはプロムナードがあり、桜並木があり、公園が整備され、子供たちが遊び、非常に豊かな空間としてもう一度蘇りつつあると思います。コンクリートの護岸は仕方がないところがあると思いますが、技術的に工夫がなされれば、これも改良の余地があると思います。ともかく、周りの環境が非常によく緑化され魅力を増しています。

神田川は、江戸の初期に掘られた人工的な川ですが、それも下町を水害から守り、さまざまな水の利用のために、そして土を使い江戸湾を埋め立て市街地を作り、一石四鳥の役割をした川です。この川をなんとかしようという思いは、さまざまな人達から呈示されています。

東京の中で水辺が少しずつ蘇ってきたのですが、まず蘇ったのは隅田川といっても良いでしょう。まだ不十分ではありますが、やはり人々の母なる東京の川、アーバンスケールの里川に対する思いが実ってきただろうと思います。また、東京都も景観条例の中で 1 番重要な景観軸に、まずは隅田川を挙げたわけです。開発も、ここでは他のところに比べれば抑制していこう、誘導していこうという気持ちが込められています。

東京再生に里川のイメージ力を

私が住んでいる杉並の個人史的な話を最後にしたいと思いますが、もともとは川の流域に古くからコミュニティが発達してきたわけです。そして、中世には鎌倉古道というものが通っており、鎌倉に行く古道もありました。ところが、江戸時代になると、放射状の街道が整備され、集落ができました。そして、近代になると中央線など鉄道沿線のコミュニティができました。しかし、もう一度古い層を思い出したいわけです。

コンパクトシティには、いろいろな要素が集まっていて欲しいわけです。東京は肥大なのですが、東京の中に数多くの川を中心としたコミュニティの単位が想定できるはずです。それぞれには文化的アイデンティティがあり、地形を利用した、かつてからの町のでき方などみんなで認識し愛着を持ち、ゆとりのある生活の中で地域をよく歩く、知る、そこを使いこなす、川が 1 つの軸になる、そして身近なところに鉄道の駅があり商店街があり飲み屋があり地域があるなど、これからはここに 1 つのコンパクトシティが作られ、また東京中にこういうものがいくつもできるであろうと思います。

これから、東京の再生にとってそれぞれの地域が重要だと思います。その時に、里川が持つイメージは大きな喚起力を持ってくれるのではないかと思います。